

日本地図の変遷とイエズス会報告

三好唯義

はじめに

古地図の上に描かれた日本列島の姿（以下日本像という）、ならびにその変遷は、日本の地図史にかぎらず、欧米をも含めた地図史全体にかかわる興味深い問題を含んでいる。特にヨーロッパの地図上に描かれた日本像という問題は、今世紀のはじめごろより外国人研究者によって、またわが国でも石橋五郎¹⁾以後、多くの注目をあび特に16世紀末までのその²⁾方面の研究は極めて詳細である。ただ先学のほとんどは全ヨーロッパの地図を対象とし、そのうえで日本像の型式分類を行なっており、各国ごとの地図学史の中で日本像の変遷を³⁾あつかった例はあまり少ない。いわば、各国ごとの地図上における日本像のタテの変遷史を整理するということが必要であると思われる。

マルコ＝ポーロが伝えたチバングは別にして、実際の日本を地図上でたどろうとした場合、それはやはりヨーロッパ諸国の中で最も早く日本と交流をもったポルトガルの地図学史⁴⁾上で行なわれねばならないもの⁵⁾と考える。筆者は拙稿においてポルトガル人が種子島に漂着し、実際の日本を認知した16世紀中ごろから、およそ1世紀間におけるポルトガル地図学史上の日本像の変遷、およびその形態分類を『P. M. C.』⁶⁾に基づいて行なった。本稿ではその概略を示すとともに、その同じ時期に記録として残っているイエズス会関係の報告書をあげて、日本像の変遷の上で、また日本に関する地理的知識のうえで、どの時期に画期が認められるのかを考えてみたい。

I ポルトガル関係地図にみる日本像

ポルトガル人の種子島漂着以後、およそ1世紀の間になんらかの形で日本像が描かれている地図は、『P. M. C.』によると表1のとおりである。以下にその型を示すことにする。

(1) ヴァリセリアナ型(図1)

日本の姿が最初に地図の上にあらわれるのは、現在ローマのヴァリセリアナ図書館に保存されている、1550年ごろ作製と考えられる、無名ポルトガル海図である。そこでは2列になった小さな島々がつながり、全体として弓形をなして表現されている。そしてその島の1つに *japan* や *Ilhas de Miacoo* (都の島)⁶⁾がある。一般にメルカトル型日本像とよばれる、メルカトル世界図(1569年)中の日本像は、このヴァリセリアナ型日本像の亜流⁷⁾であるが、さらに重要なことは、次のオーメン型日本像との連続性が⁸⁾考えられることである。

(2) オーメン型(図2)

日本は一見朝鮮半島かと思えるように、大陸と連続して描かれる。この型の初現は1554年のロボ＝オーメン作世界図中である。この日本像はロボの息子ディオゴ、甥のアンドレとひきつがれ、ポルトガルではドミンゴ＝テイセラに、またポルトガル以外ではヴェニスで多年働いたアントニオ＝ミロによって1582～84年に採用される。

(3) ヴェリュ型(図3)

ヴァルトロメウ＝ヴェリュの作製した海図等にみられる日本像で、前記のオーメン型日本像を大陸部分から切り離し、島となし、現在の目で見て九州、

四国、本州、北海道がそれぞれ区別できるという注目すべき姿となっている。特に北側の大島に関しては、ポルトガルの研究者A・コルテザンや中村拓のごとく、エゾ島（北海道）を表現したものの考えもあるが、その大島には“島には多くの金と銀がある”と読める文字があるところから、ヨーロッパに伝わる金銀島伝説に基づいて描かれたものという考え方のほうがより一般的である。このヴェリュ型日本像は、緯度としては九州南端部分が北緯31°くらいではほぼ正確なもの、他の諸地点は実際とはかけはなれている。しかし、全体の構成といい、地名の豊富さといい、かなりできのよい日本像といわねばならない。このヴェリュ型日本像は1560年代以後はオランダのオルテリウスによって、その姿が採用されるものの地図上からは無視される。

(4) ドゥラード型 (図4)

この型の日本像は三日月状に南へのびた半島を特徴とするもので、形態的には日本全体の西半分によく一致する。ドゥラード型日本像の初現は1563年のラザロ＝ルイス作地図帳中の一枚においてであり、¹¹⁾ インドのゴアで地図製作活動をしたファズ＝ドゥラードの地図帳中にみられるものとして著名である。

このドゥラード型日本像はポルトガル地図史の上からみるとアジアで作られた最初の日本像として、前出のポルトガル本国で発展してきた三つの型とは別に新たに生まれたものと考えられ、時を同じくしてみられたヴェリュ型日本像よりも強い影響力をもち、16世紀末になってもその姿をのこしている。このことは、この日本像がアジアで生まれたということ、つまりインドのゴアで活動していたファズ＝ドゥラードの力、権威とも考えられる。ポルトガル本国で発展した日本像（ヴァリセリアナ型、オーメン型、ヴェリュ型）はメルカトル、オルテリウスによって、1560年代にはポルトガル以外の国でもみられるが、ドゥラード型日本像はそれらよりおくれ、¹²⁾ 1580年代にオルテリウスによって採用される。

(5) フローレンス図 (図5)

この図はイタリアのフローレンスの文書館に保存されている行基図式日本図である。方位をあらわす東西南北の文字はポルトガル語（東西の方位はラテン語でも同時に書かれている）で記されているところから、ポルトガル人が関与したことが考えられる。この図は1580年前後に描かれ、1582年に長崎を出航した遣欧使節団とともにヨーロッパへ渡ったものと考えられる¹³⁾。本図は日本像の一型式として分類されうるものではないが、ポルトガル地図学上に、わが国の行基図がはっきりとした影響を与えたことを示す最初のものとして、重要な位置を占めると思われる。

(6) テイセラ型 (図6)

この日本像は行基図を基礎としたもので、17世紀になるとエゾ島も加わるという、地図上の日本像としては完成に近づいた形態である。ルイス＝テイセラの原図（この原図は1591年～92年の初めごろに描かれたか、もしくは入手されたものであろう）¹⁴⁾に基づいて、オランダのオルテリウスが刊行した日本専図（1595年）以後この形態はみられ、改良が加えられつつ1649年のジョアン＝テイセラ作図によって緯度、形態とも進んだより正確な日本像がみられる。この後の半世紀の間には前記の4型式はほとんどみられず、形態的には大きな変化はない。

16世紀中葉から約1世紀間のポルトガルに関係する地図上でみる日本像は、①ヴァリセリアナ型、②オーメン型、③ヴェリュ型、④ドゥラード型、⑤テイセラ型に区分される。①～③はポルトガル本国において1560年代までに作製されたもので、形態的に連続して発展したものと考えられる。この日本像の系統はインドのゴアで地図製作活動をしたファズ＝ドゥラードの日本像にとってかわられ、テイセラ図（1595年）以後の半世紀はテイセラ型日本像が定着する。それ以前の半世紀間に4つの日本像が出現するということは、漠然とした情報をもとにしていた

と考えることができる。

地図上でみるかぎり、日本像の形成過程はこの漠然とした情報にもとづいた時期と、それ以後のより確かな情報にもとづいた時期（行基図の影響がみられることと、日本像の形態上大きな変化がおこらない）とに大きく二分され、その画期を示すものは日本の行基図の模写である1580年ごろ作製のフローレンス図といえる。つまり、この図以前の4型式の日本像には行基図の影響が積極的に認められず、ポルトガル地図作製者は日本に関する地理的な情報を¹⁵⁾それほど多く所有していなかったことが考えられる。

II イエズス会報告にみる日本像

地図の上での日本像の変遷は上に略述したとおりであるが、このことが地図以外の資料にどのように書かれ、どれほどの一致点があるのであろうか。文書・記録で日本の地理的特徴がどれほど記されているか、ここではイエズス会士の報告に触れてみたい。¹⁶⁾（表2参照）

筆者がイエズス会士の日本報告を重視する理由としては、第1にイエズス会はポルトガルの後押しでアジアに進出したのであるから、この両者間に密接な関係が考えられること。第2に時代的に16世紀後半から17世紀前半にかけて、地図の発展と平行して資料が存すること。第3に宣教師たちが当時の一応の水準以上の教育を受けていると思われ、かつ地理的記述には宗教的な事柄よりも客観性が認められること。第4にイグナシオ＝モレイラ、アンジェリス神父、カルディム神父等、直接に地図を作製またはそれに関与した人物が存すること、などがあげられる。

(1) イグナシオ＝モレイラ以前

日本に関するイエズス会士の報告中、最もはやいものは、フランシスコ＝ザビエルの書翰である。¹⁷⁾これをみると日本は中国大陸のそばに横たわる大きな島々から成りたっている。つまり島であるというこ

とは早くより理解されており、オーメン型の日本像のように大陸とつながっているという報告はみられない。また、その繁栄ぶりから堺が、高名な大学として坂東が、またザビエルの滞在地としての鹿児島などの名がしばしばみられる。しかし、緯度数などの数値もなく、日本の島々がどのような構成であるかといった記述もなく、寒さがきびしいといった感想はみられるものの、都（京）から東に関しては、北の遠いところに坂東があるといった漠然とした地理観しかない。ザビエル以後、多くの宣教師が多くの日本報告文を送っているが、その中には地理的記述もわずかながら含まれるものの、都市名やエゾに関する報告をのぞいては、全体の地理観はザビエルのものとあまりかわらない。

次にイエズス会のインド管区長であった、そして日本にも巡察使として来日したことのあるヴァリニャーノの「日本諸事要録」(1583年)においても、日本は北緯三十七、八度に位置し、六十六カ国に分かれた多数の島嶼からなる地方であり、「聞くところによると二百リーグア以上の長さを有し、幅はせまい」とのことである。¹⁸⁾このことは「当時もっとも¹⁹⁾確実と思われた意見に基づいて」²⁰⁾いるのである。このころにおいても、日本国内の地名は多数報告されており、その地名間の距離なども何に基づいているのか不明であるが記されている。しかし、そのことを除いた日本に関する地理的記述は少なく、日本の全体像はつかめていない。「ただ、日本は六十六カ国を有する」という記述があるが、このことから思いつくことは宣教師たちが、いわゆる「行基図」に接したのではないかということである。それは1580年前後の作と推定されるフローレンスの日本図は「行基図」を模写したものであり、この頃には「行基図」がポルトガル人の知るところであったと考えられるからである。この「日本は六十六カ国を有す」という報告をたどってゆくと、1564年7月15日の報告²¹⁾までさかのぼることができ、この年以後「日本は

六十六カ国」という記述がしばしば見られる。これを「行基図」からの情報とするならば、1560年代の前半にポルトガル人と行基図との接触が考えられる。

次に緯度に関しては日本の東部、北部が宣教師にとっては未知の世界だったらしく、日本の北がどこで終るのかといったことは問題になっておらず、ただ漠然と北緯37°~38°に位置しているとヴァリニャーノは述べている（日本がおよそ北緯37°~38°に位置するというのは、この当時の代表的な日本像であるドゥラード型に一致する）。

(2) イグナシオ=モレイラ以後

以上、ヴァリニャーノの1583年の「日本諸事要録」までは漠然とした日本像であるが、同じ人物の1592年の「日本諸事要録補遺」になると、はるかに進んだ記述がみられる。つまり、まず日本が主な三つの島から成り立っているということが記される。日本が66カ国から成るということは前述したように、以前から知られていたが、日本が三つの島で成り立っているということは、他の宣教師の報告でも1586年10月17日付の報告が最初であろう。²²⁾そして、日本全体の緯度が誤まっているものの記されており、日本の主軸の方向も書かれている（西南西から東北東の方向）。また、これ以後は、1620年から2年間の間に編述されたといわれるロドリゲスの『日本教会史』の中では、²³⁾「航海渾天儀」²⁴⁾を使って多くの地点の緯度が計測されたことが記され、日本の各旧国ごとの地理的記述も細かく豊富になっており、イエズス会が収集した情報の豊かさが伺われる。

ヴァリニャーノの1583年「日本諸事要録」の言葉を信ずるならば、イエズス会の有していた日本に関する地理的情報は、その当時まではそれほど多くなく、また確かなものも把握していなかったことがわかる。しかし、それ以後イエズス会の宣教師の報告にも日本が大きな地方、島から成ることなどが書かれるようになり、1592年「日本諸事要録補遺」になると、よりすすんだ日本記述がみられる。

このことはヴァリニャーノが「日本諸事要録補遺」の中で述べている。イグナシオ=モレイラ以後、イエズス会の日本に関する地理的情報の収集活動がより具体的に行なわれたと考えられ、1590年に来日したモレイラが重要な位置を占めていることが想像される。

イグナシオ=モレイラに関して日本で最も早く言及したのは岡本良知であり、氏は以後モレイラなる人物を高く評価し、彼が作製したであろう地図をも認め、それと他の地図との関係をも考察している。一方、日本独自の地図がヨーロッパの地図作製家に影響をおよぼしたと考える中村拓は、「今日現存するおびただしい日本関係の地図資料に Moraira 図の影響など痕跡だに見出すことはできない。」²⁵⁾と、辛辣な言葉をもって批判している。そして、モレイラ図の存在を認める岡本氏と、それを否定し日本独自の地図を主張する中村氏の対立は、結局のところ相原良一のいうように「……中村博士の主張する『戦国時代の日本総図』も、岡本氏の主張する『イエズス会新作図』も共に現存しないのであるから、原図そのものが現れるまでは推定の域を出ない。……」²⁶⁾ということになる。しかし、天体観測器を用いて各地の緯度を計測したということが史料に書かれている。つまり16世紀の日本地図作製にかかわりあいがあったことが、史料の上で考えられるモレイラなる人物を、無視することはできないものと思われる。

彼の経歴としては、ヴァリニャーノの「日本諸事要録補遺」の中ではポルトガル人と書かれており、1538年か1539年にリスボンで生まれたものと考えられている。²⁷⁾史料の上からモレイラの姿が判明するのは1588年11月25日付の、ヴァリニャーノからローマのイエズス会々長への手紙の中である。そこでヴァリニャーノはモレイラのことを「聡明な知識のもち主で、地理学、地理学的研究にも適度に精通している人物」²⁸⁾として、イエズス会に迎えるようにと述べている。このヴァリニャーノのモレイラ観は変わる

ことなく、「日本諸事要録補遺」(1593年)の中でも彼の地理的才能や知識を強調しているし、ヴァリニャーノが書き始めた「日本教会史」(1601年)の中でも「世界地誌に関していくらかの知識をもっていた一人のポルトガル人が日本の正確なる地理的記述をするために大変注意深い調査を行なった²⁹⁾」と述べている。このモレイラは1590年7月21日、ヴァリニャーノと共に日本に着き、京都で秀吉に謁見後、一ヵ月ほど京都に滞在し、長崎に帰った。1591年のクリスマスの日には島原半島の八良尾にいたことがわかっており、1592年7月18日には長崎にいた。この間に「日本諸事要録補遺」に述べられているように、「日本のおよその形、長さ及び幅について実際の知識を得ようとしてきわめて熱心に探求した」のである³⁰⁾。1592年以後のモレイラは、ヴァリニャーノの「日本教会史」(1601年)の中で地図学的な諸活動は述べられているものの、1588年のヴァリニャーノの推薦の結果、モレイラがイエズス会に入会できたのかどうかは不明であるし、いつ死んだのかもわかっていない。

次にモレイラの地図学的な諸活動を史料の上からみると、*Japonicae tabulae explicatio*³¹⁾では「注意深く、彼はこの全地域(つまり日本)を天体観測器によって、その地理的位置を記述した。しかし、彼はまたこの問題に関してよく精通している多くの日本人に、細かく、また注意深く教えられた³²⁾」と書かれ、ヴァリニャーノの「日本諸事要録補遺」(1592年)では「前記ポルトガル人が天体観測器を用いて調べたところによれば、日本は北緯三十度半から始まって北緯三十九度に達している。実のところ、彼はそこまで到達したわけではなく、どれほど(緯度が)上がるかを正確に知り得なかったのであるが、種々の情報に基づき、推定によってそう判断したのである。」³³⁾と述べられている。同じくヴァリニャーノの「日本教会史」(1601年)では「ミヤコの宮殿に私と同行したイグナシオ＝モレイラは日本の正確な

記述をするのに非常な苦勞をした。彼は彼の通った多くの場所で、北極星の確かな、そして正確な高度を取った。そして彼が行くことができなかった場所については知識に対する非常な熱心さをもって聞き取り調査を行なった。彼の見た地域に関しては、それ(彼の日本図)は熱心な調査と正確さをもって作製された。そして残りのところは、自分の行なった聞き取り調査から導くことのできるものの内、最も見込みのある最高の程度をもって記録している。」³⁴⁾と書かれ、フィールドワークと聞き取り調査の方法がとられていることが理解できる。

そのような調査の結果、モレイラが日本図を作製したかどうかという問題であるが、*Japonicae tabulae explicatio*の中には地図の説明がある。シュツ神父は論文の中で、*Japonicae tabulae explicatio*が書かれた年が、ヴァリニャーノの「日本諸事要録補遺」(1592年)とあまりかわりがないこと、また地理的作業を書いた文脈が「日本諸事要録補遺」(1592年)とかわりがないこと、等々から *Japonicae tabulae explicatio* もモレイラのことを書いているのであり、そこに説明されている地図もモレイラが描いたものとするに何の疑問も存在しえず、ヴァリニャーノは「日本教会史」(1601年)に類似の小縮尺図を載せたとしている³⁵⁾。

加えて、克明な日本地誌に関する記述を有する宣教師ロドリゲスの「日本教会史」や、その中に存したといわれる日本図³⁶⁾、また、日本へ一度も渡ったことがないにもかかわらず、くわしい日本図(1646年)をのこしたカルディム神父のことを考えるならば、モレイラがヴァリニャーノと共に来日して以後に、イエズス会の日本に関する地理的調査が本格化されはじめたと考えられるのではなからうか。

それでは、その際の日本側からの地図を含む地理的情報の提供ということであるが、そのこと自体は否定されることではないが、日本側の情報が重き役割を果たしえず、イエズス会独自の調査が行なわれ

たであろうことは、次の言葉からも想像できる。

「日本人が世界誌についてはほんの僅かしか知らないか、あるいはまったく知らないし、³⁷⁾」

「この日本の国、領土はいくつかの島々から成っている、しかし実際は、ただ三つの大きな島があるだけである。それらの記述については今まで相異なった意見が存在していた。大古の昔から、日本人はこれらすべての島々の地理学的地図をもっていた。しかし彼らは世界地誌の知識をもっておらず、また北極星の高さ、つまり緯度に関することを何も知らなかったので、彼らは信頼できる、よい作図法を持っていなかった。私が述べたように日本人はこの科学(“arte”つまり“世界地誌”特に“地図学”)に関して何も知らなかったので、彼は地理的な地図や、事実に応じた必要な細かさをもった日本記述を描くに当たって、日本人の情報を十分に頼ることはできなかった。³⁸⁾」

以上、イエズス会の日本に関する地理的記述というものをみたわけであるが、その記述は1583年のヴァリニャーノの報告以前の漠然とした日本認識を記述した時期と、それ以後のものに二分されるものであり、後者の時期にヴァリニャーノが言うところの「イグナシオ＝モレイラ」が、またロドリゲスの言うところの「学者たち」が積極的に緯度の計測等を行なったことがうかがえる。

そこに記された日本は、ザビエルの時代には「シナの直ぐ近くに横たはる大きな島」から、ヴァリニャーノ「日本諸事要録」(1583年)では「北緯三十七、八度に位置している」、同「補遺」(1592年)では「北緯三十度半から北緯三十九度」に、そしてロドリゲス「日本教会史」(1620年頃)では「北緯三十度二分の一から北緯四十二度二分の一」(ただし、南端を九州坊の岬、北端を津軽半島竜飛崎)となっており、日本は全体として南に半度、北に一度異なって見積られている。

これをカルディム神父の作成した日本図(1646年

刊)と比較すると以下のとおりである。前者がロドリゲス「日本教会史」、後者がカルディム図の値である。・九州南端(30° $\frac{1}{2}$, 30° $\frac{2}{3}$)、・九州北端(34° $\frac{1}{2}$, 34°)、・本州南端(32° $\frac{1}{2}$, 33° $\frac{1}{3}$)、・本州北端(42° $\frac{1}{2}$, 39° $\frac{5}{6}$)、・四国南端(32° $\frac{1}{2}$, 32° $\frac{1}{2}$)、・四国北端(34° $\frac{2}{3}$, 34° $\frac{1}{3}$)、・エゾ南端(ナン、約40°)となっており、カルディム図により一層の緯度の訂正がみられる。このことは時代がすすむとともに、イエズス会自身の有していた情報量が増加しつつあることが考えられるのである。

おわりに

1543年(天文12)、ポルトガル人が種子島に漂着して以来、ポルトガル関係地図の上に日本の姿が現われる。その地図上の日本像を型式分類すると、①ヴァリセリアナ型、②オーメン型、③ヴェリュ型、④ドゥラード型、⑤テイセラ型に区分され、連鎖状の群島として描かれた日本はおよそ1世紀をへて、1649年のジョアン＝テイセラI図において形態、位置共に格段の差を示すことになる。

この五型式の日本像のうち、①～③はポルトガル本国において1560年代までに作製される。この系統の日本像はインドのゴアで地図作製活動をしたファズ＝ドゥラードのつくった日本像にかわり、1595年のルイス＝テイセラ図以後はテイセラ型日本像が定着し、大きな変化はみられない。それ以前の半世紀間に他の四型式がみられるが、短期間に四つの型が出現するという事は、その作製においての情報の曖昧さが感じられる。

このことは文字に残された報告文にもみられる。つまり、漠然とした情報を基礎とした日本像の時期とは「当時もっとも確実と思われた意見に基づいて」記述しても、「日本は六十六カ国に分かれた多数の島嶼から成る地方である。聞くところによれば、二百リーグア以上の長さを有するが、幅は狭い。所によっては十五リーグア、あるいはそれ以下であり、

もっとも広い所でも二十、あるいは三十レーグアを越えない。北緯三十七、八度に位置しているのは、はなはだ寒く、雪が多い」とヴァリニャーノが報告に書いた1583年以前のことであり、地図上の日本像ではヴァリセリアナ型、オーメン型、ヴェリュ型、ドゥラード型が含まれる時期である。つまり、漠然とした報告しか獲得しておらず、地図の上で日本側の地図（行基図）の影響があきらかには認められない時期である。しかし、この漠然とした情報を基礎とした日本像の時期においても、九州の南端が早くより北緯30°~31°に位置しているのは注目に値する。

ただ、漠然とした情報を基礎とした日本像の時期の中で最後のものと考えられる、インドのゴアで作られたドゥラード型日本像への日本からの情報提供は、ポルトガル本国で発展した他の三つの型よりも認められる。それは西日本を表現したであろうと思われる形態や、そこに記された旧国名、地名の豊富さ、正確さから日本側の情報提供が想像される。また、ドゥラード型の初現である1563年のラザロ・ルイス作地図の頃になると、イエズス会士の報告の中にも「日本は66か国から成る」といった文がみられ、ポルトガル側に日本国内の旧国名や地名、旧国の数などが伝わったことがわかり、これがもし行基図等の地図からの情報であるならば、その形態も伝わった可能性が考えられる。このドゥラード型日本像は、1585年のルイス＝テイセラ作と考えられる地図にも採用されているところからみても、この時期——ヴァリニャーノが1583年の報告書で日本観を書いた時期——までを漠然とした情報に基づく日本像の時期と考えることができる。

次に、より具体的な情報を基礎とした日本像の時期であるが、第一に地図上の日本像の変遷から考えると、ルイス＝テイセラが1592年頃に作製もしくは入手し、1595年にオルテリウスによってオランダで出版された日本図があきらかに行基図の影響を示し、以後形態的には大きな変化を起こさないこと。第二

に報告文から考えると、「彼は、私と同道して都に至ったが、渡日して二年余りの間に、日本のおよその形、長さ及び幅について実際の知識を得ようとしてきわめて熱心に探求した。」、そして「天体観測器を用いて調べたところ」とヴァリニャーノがイグナシオ＝モレイラの実際的な地理的調査について述べている1592年の報告書の頃から具体的な調査が考えられること。以上の二点から1590年頃が具体的な情報を基礎とした日本像の時期の開始と考えられる。

地図と報告文とを合わせて考えてみると、1580年ごろ作製され、遣欧使節と共にヨーロッパへ伝わったと思われるフローレンスの手書日本図からもわかるように、1580年代には行基図の存在はポルトガル地図作製者やイエズス会の知るところであったのであろう。これは宣教師の報告にも、1580年代になると「日本が三つの地方、すなわち島からなっている」という事柄がみられるようになってくる。しかし、フローレンスの手書日本図をみても緯度は記されておらず、日本国内の旧国名などがわかる程度であり、世界地図の中で位置づけることはできていない。このことは当時日本に滞在していたイエズス会宣教師の中に、地図学に秀でた者が存在していなかったことをおもわせる。それが1590年に巡察使ヴァリニャーノと共に日本へ来たモレイラ以後、イエズス会の地理的調査がすすみ、1620年頃記述されたロドリゲスの「日本教会史」や、1646年刊のカルディム神父の日本図のように、詳細な日本地理に関する知識、情報を有するようになるのである。

このイグナシオ＝モレイラの日本における活動時期と、ポルトガル地図学史上で日本像が定形化しはじめる時期——1595年刊のテイセラ図（ポルトガルのテイセラの手元には、この原図が1591~92年頃にあったと思われる）——とが一致することは、この時期に日本像に関する基本的認識の面期があったことを思わせるのである。さらには、地図上の日本像がイエズス会の宣教師、ひいては彼らの残した報告

表1 ポルトガル関係地図にみられる日本像

製作年	作者 ()は推定者	日本像	備考
C. 1535	無名		Os Iequios の書かれた32個の島群
C. 1550	無名	A	ヴァリセリアナ図書館蔵
1554	ロポ＝オーメン	B	
1558	ディオゴ＝オーメン	B	
C. 1558	(ディオゴ＝オーメン)	B	
1559	アンドレ＝オーメン	B	チパング型の日本もあり
C. 1560	無名	B	
C. 1560	(ヴァルトロメウ＝ヴェリュ)	C	
C. 1560	(ヴァルトロメウ＝ヴェリュ)	C	
1561	ディオゴ＝オーメン	B	
1561	ディオゴ＝オーメン	B	
1561	ヴァルトロメウ＝ヴェリュ	C	
1561	ヴァルトロメウ＝ヴェリュ	C	
1563	ラザロ＝ルイス	D	
C. 1565	(ディオゴ＝オーメン)	B	
C. 1565	(ディオゴ＝オーメン)	B	
C. 1565	(セバスティアン＝ロベス)	D	
1568	ディオゴ＝オーメン	B	
1568	ファズ＝ドゥラード	D	日本単独図
1570	ファズ＝ドゥラード	D	
1571	ファズ＝ドゥラード	D	
1573	ドミンゴ＝テイセラ	B	
1575	ファズ＝ドゥラード	D	
C. 1576	(ファズ＝ドゥラード)	D	
1580	ファズ＝ドゥラード	D	
C. 1580	無名		フローレンス図(行基図写し)
C. 1583	(セバスティアン＝ロベス)	D	
C. 1585	(ルイス＝テイセラ)	D	
1595	ルイス＝テイセラ	E	日本単独図
1596	ヴァルトロメウ＝ラッソウ	D	
17世紀初期	無名	E	
1613	エレイディア	E	「ieso」島あり
C. 1615～	(エレイディア)	E	
1622	アントニオ＝サンチェス	E	
1623	(ジョアン＝テイセラ I)	E	
C. 1628	(ジョアン＝テイセラ I)	E	
C. 1628	(ジョアン＝テイセラ I)	E	
1630	ジョアン＝テイセラ I	E	
1630	ジョアン＝テイセラ I	E	
1630	ジョアン＝テイセラ I	E	
C. 1630	無名	E	
C. 1632	ジョアン＝テイセラ I	E	
C. 1632	(ジョアン＝テイセラ I)	E	
1635	ベドロ＝ベルセロット		九州南端部のみ
C. 1640	(ジョアン＝テイセラ I)	E	
1641	アントニオ＝サンチェス	E	

1641	アントニオ＝サンチェス	E	イエズス会土作日本図
1641	アントニオ＝サンチェス	E	
1643	ジョアン＝テイセラ I	E	
1643	ジョアン＝テイセラ I	E	
1646	アントニオ＝フランシスコ＝カ ルディム	E	
1649	ジョアン＝テイセラ I	E	
1649	ジョアン＝テイセラ I	E	

A ヴァリセリアナ型日本像 B オーメン型日本像 C ヴェリュ型日本像
D ドゥラード型日本像 E テイセラ型日本像

文に影響を与えたか、またはその逆であるかといったような問題は、将来の詳細な研究をまたねばならないものの、その日本認識において両者とも同時期に画期がみられるということは、イグナツォ＝モレイラなる人物を評価し、ポルトガル地図作製者とイエズス会との緊密性、またはアジアにおけるイエズス会の地理的・地図的諸活動というものを考えるべきであると思われる。このことはわが国で独自に発展した日本図がヨーロッパに影響を与え、ポルトガル関係地図でいうならば1554年のロポ＝オーメンの日本像においてもその影響下にあるとする説を「さらに検討を要する⁴⁰⁾」ということの意味するものとも

思われるのである。

(神戸市立博物館・学芸員)

〔附記〕 本稿は昭和56年度関西大学修士論文の一部を加筆修正したものである。常に御指導していただいている織田武雄先生をはじめ、末尾至行先生ならびに関西大学文学部地理学教室の先生方に感謝いたします。

なお、図1・2・3・4・5の写真は、松本賢一編『南蛮紅毛日本地図集成』（鹿島出版会1975年）を利用させていただきました。記してお礼申し上げます。

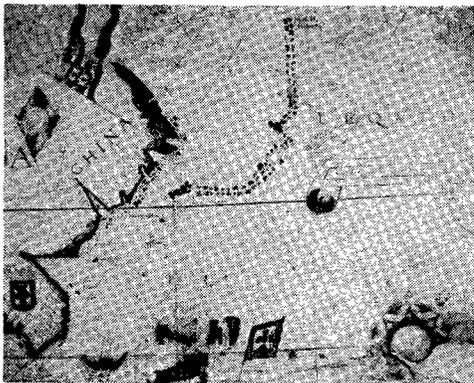


図1 ヴァリセリアナ図 (C. 1550)
(松本賢一編『南蛮紅毛日本地図集成』より)

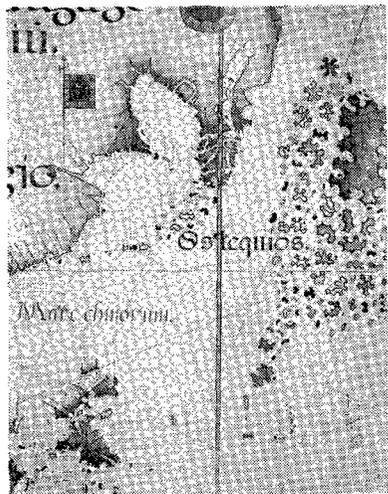


図2 ロポ＝オーメン (1554年)
(松本賢一編『南蛮紅毛日本地図集成』より)

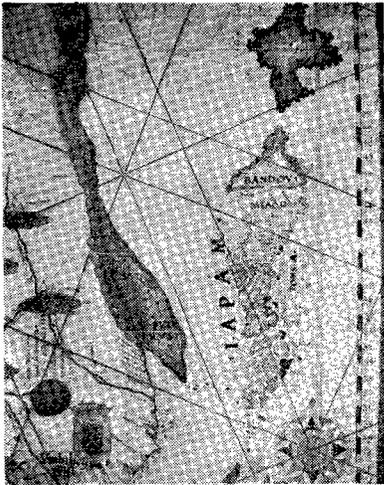


図3 ヴァルトロメウ=ヴェリュ (1561年)
 (松本賢一編『南蛮紅毛日本地図集成』
 より)

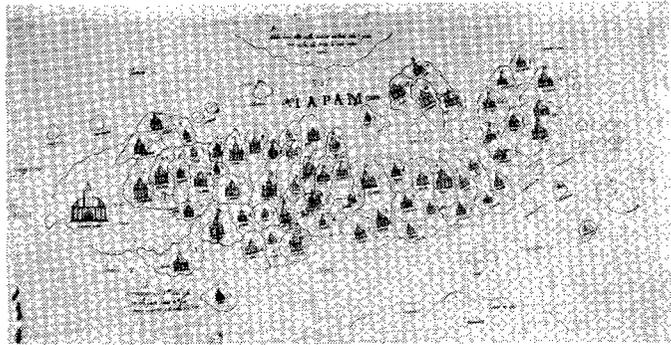


図5 フローレンス図 (C. 1580)
 (松本賢一編『南蛮紅毛日本地図集成』より)

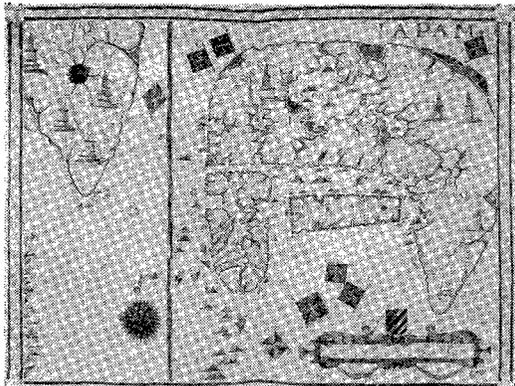


図4 ファズ=ドゥラード (1568年)
 (松本賢一編『南蛮紅毛日本地図集成』
 より)

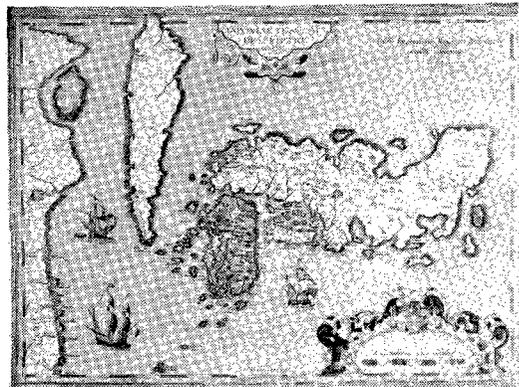


図6 ルイス=テイセラ (1595年)
 (神戸市立博物館蔵)

表2 イエズス会関係日本報告

	日本全体に関するもの	日本地誌	距離・緯度
ザビエル書翰	<ul style="list-style-type: none"> 日本諸島=大きな島々 (15480120) 日本はシナの直ぐ近くに横たはる島である (15490112) 日本の国はとても大きな島島からできている (15520129) カステリア人は此の島々をプラタレアス群島(銀の島)とよんでいる (15520408) 	<ul style="list-style-type: none"> 都は戸数が九万以上 (15491105) 都は九万六千戸、リスボアよりも大 (15491105) 都を去ること、最も遠く坂東がある (15491105) 堺の繁栄 (15491105) 都はかつて十八万戸が櫛比、今でも十万戸以上 (15520129) 有名な大学たる坂東は随分北の方に存在している (15520129) 寒さのきびしい日本 (15520407) 神父は宇宙の現象のことを知っているのと都合がよい (15520409) 	<ul style="list-style-type: none"> ゴアから日本まで一三〇〇レグア以上ある。(15490112) 我々は六千レグアの波濤を蹴立ててポルトガルから来朝 (15491105) 鹿児島から都まで三百レグア (15491105) 山口はゴアからは一四〇〇レグア以上、ローマからは六〇〇〇レグア以上離れている (15520409)
イエズス会士の報告	<ul style="list-style-type: none"> 日本国の北方殆ど北極の直下に蕃人の大なる国あり (15650220) 信長は欧州より日本に来る旅程を説明せんことを請ひ、之(地球儀)を見て大に喜び (15801020) 日本は全く島々より成る国であり、三つの地方よりなる (15861017) 	<ul style="list-style-type: none"> ポルトガルより寒く山多い (15540424) リスボンと同じ大きさと言へる山口 (15580110) 日本の島はイスパニアと同じ緯度に在り、気候も同一。聞くところによれば長さ六百レグワ、降雨はインドにおけるが如く夏にあり (15611008) 鹿児島降雨甚だしく雪深かりしため (15621025) 日本の島は六十六カ国に分れ (15640715) 当日本は六十六カ国を有し (15641009) 日本国の北方、殆ど最後の国なる坂東は都よりも科学及び研究の盛なる地である (15660905) 全日本が六十六カ国に分れ、主なる区分は三つ (15880220) 	<ul style="list-style-type: none"> 豊後(府内)=北緯三十三度半 (15611008) (∴実際はおよそ33°半) 鹿児島=北緯三十一度 (15611008) (∴実際はおよそ31°半) 堺=北緯三十五度半 (1562) (∴実際はおよそ34°半) 日本より海上二十日路の所に琉球 Lequios、海上十日の所に高麗 (15710204) エズー日本より同国まで海を越えて百五十レグワあり (15711006) <p>∴ (15880220) は1588年2月20日を示す。</p>
ヴァリニャーノ「日本諸事要録」(1583)	<p>日本は六十六カ国に分かれた多数の島嶼から成る地方である。聞くところによれば、二百レグア以上の長さを有するが、幅は狭い。所によっては十五レグア、あるいはそれ以下であり、もっとも広い所でも二十、あるいは三十レグアを越えない。北緯三十七、八度に位置しているので、はなはだ寒く、雪が多い。</p>		
ヴァリニャーノ「日本諸事要録補遺」(1592)	<ul style="list-style-type: none"> イグナシオ=モレイラの地理的調査 全体は三百レグア。下から奥州へ西南西から東北東の方角に向かい 北緯三十度半から北緯三十九度 		
ロドリーゲス「日本教会史」	<ul style="list-style-type: none"> 日本の緯度の範囲……坊の岬の北緯三十度三分の一にはじまり四十二度二分の一にある奥州の津軽まで。 日本の経度の範囲……子午線の一五三度にあたる五島列島から一六八度にある大島(本州)の東海岸まで。東西十五度 本州の緯度の範囲……熊野の北緯二十二度にはじまり竜飛崎の四十二度二分の一に終る。緯度で十度 (∴別の所で熊野の岬は三十二度二分の一) 本州の経度の範囲……長門の経度一五五度に始まり北緯三十五度に平行して東に行き、常陸の国の東海岸の経度一六八度に終る。経度で十三度 九州の緯度の範囲……坊の港北緯三十度二分の一にはじまり、門司の北緯三十四度二分の一に終る。 九州の経度の範囲……経度一五四度に始まり、豊後の国の子午線一五五度二分の一に終る 四国の緯度の範囲……北緯三十二度二分の一に始まり、三十四度三分の二に終る。 四国の経度の範囲……子午線一五五度三分の二に始まり、阿波 Aua の国の一六一度に終る。 Yezo の島 ……大きさは日本の三つの大きな島の第二番目の島と同じか、それよりは大きいからである。 		

〔注〕

- 1) P. Teleki: *Atlas zur Geschite der Kartographie der Japanischen Inseln*. 1909, E. W. Dahlgren: *Les Debuts de la Cartographie du Japon*. 1911
- 2) 石橋五郎「アメリカ発見前後の地図地球儀とジバング(上),(下)」史林11—3~4, 1926。主なものとしては、岡本良知『十六世紀 世界地図上の日本』弘文荘, 1938。中村拓『鎖国前に南蛮人の作れる日本地図』I~III, 東洋文庫, 1966。岡本良知『十六世紀における日本地図の発達』八木書店, 1973。
- 3) ポルトガルに関しては岡本良知と室賀信夫の論が知られる。(室賀信夫「西洋の地図に現われた東アジア」『探訪 大航海時代の日本』1 小学館, 1978)
- 4) 三好唯義「ポルトガル地図学史上における日本地図の変遷」神戸市立博物館研究紀要1, 1984
- 5) *Armand Cortesão & Teixeira da Mota: PORTUGALIAE MONVMENTA CARTOGRAPHICA I~IV*, LISBOA, 1960
- 6) japan の右側に LEQVIOS と大きな文字で書かれている。
- 7) メルカトルとヴァリセリアナ図との関係は不明である。(織田武雄「メルカトルとその作品について」『古地図研究』100号, 1978)
- 8) 室賀信夫「ポルトガル人の描いた初期の日本像 いわゆるオーメン型日本図について」(『古地図研究』100号, 1978。)
- 9) 『P, M, C.』vol. V, 174頁
中村前掲2) 34頁
- 10) 岡本前掲2) 1973, 23頁。織田武雄『古地図の世界』講談社, 1981, 227頁
- 11) この海図の中に書かれた枠の中には以下のように記されている。
“この図には以下のものがのっている。 Bengal, Pegu, Tenasserim の王国, Mallacca, Sumatra・Java・全 Sunda の島々, Timor や Banda の島々, Moluccas 諸島, Timor 島, Borneo 島, Magellan が冬を過ごした土地, 彼が殺された島, Laos や Licos の海岸, Canton の王国, Sian の王国, China の王国とそのすべての属州, Lardrones島, 全日本”『P, M, C.』vol. II, 115頁。
- 12) 1589年刊オルテリウス「太平洋図」中の日本像は典型的なドゥラード型であり、さらにその北側に大島があるといった注目すべき姿となっている。
- 13) 『P, M, C.』vol. II, 128頁。
秋岡武次郎『日本地図史』河出書房, 1955, 189~190頁。
- 14) 『P, M, C.』vol. III, 65頁。
- 15) しかし、一般にはオーメン型日本像にも日本の行基図の影響があるとする中村拓の論(前掲2の「DIOGO HOMEEM型」の日本図の項)が認められている。一方、その論に検討を加える必要性もとなえられている(室賀前掲8)。
- 16) イエズス会と日本地図をあつかったものとしては、George Kish: '*The Cartography of Japan During the Middle TOKUGAWA Era. A Study in cross-cultural influences*'. A. A. A. G. XXXVII, 1947, George Kish: '*Some Aspects of the Missionary Cartography of Japan during the sixteenth Century*'. *Imago Mvndi* VI, 1950, などがあり、C. R. Boxer: *The Christian Century in Japan 1549—1650*, 1951 の中にも地図に関して記した部分がしばしばみられる。
わが国においては岡本良知によってはやくよりイエズス会士の報告文、さらにはイエズス会新作図というものが精力的にあつかわれている。(岡本前掲2の二著書)
- 17) アルベ神父、井上郁二訳『聖フランシスコ・デ・ザビエル書翰抄』上, 下, 岩波書店, 1949。
- 18) ヴァリニャーノの報告文が重視される理由としては、ヴァリニャーノ自身が何度かの日本巡察を行なっていることや、その地位の高さから当時の宣教師たちの情報はほとんど彼の手もとに集まっていると考えられること、加えてヴァリニャーノ自身の文書はほとんど非公開性のものであることである。松田毅一は「これらはフロイスをはじめとする一般宣教師の公開性の通信や『日本年報』とは本質的に異なったものである。」としてその重要性を語っている(松田毅一『南蛮史料の発見』中央公論社, 1964, 173~174頁)。
- 19) ヴァリニャーノ, 松田毅一他訳『日本巡察記』東洋文庫229, 平凡社, 1973, 5頁。
- 20) 前掲19) 160頁。
- 21) 村上直次郎訳『耶蘇会士日本通信(上)』聚芳閣, 1927。

- 21) 村上直次郎訳『イエズス会日本年報 下』雄松堂, 1969。
- 22) ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』大航海時代叢書IX, 岩波書店, 1967, 150頁。
- 23) 岡本良知「十六世紀後半ヨーロッパ人作世界地図上の日本の変遷」歴史地理, 66-6, 1935. 13頁。
- 24) 中村拓「欧米人に知られたる江戸時代の実測日本図」地学雑誌78-1, 1969, 6頁の注(10)。
- 25) 相原良一「日本地図の発達に及ぼしたイナッソ・モレイラの影響を示す両半球世界図」横浜市立大学論叢人文科学系列26-3, 1975, 130~131頁。
- 26) Schütte S. J.: 'Ignacio Moreira of of Lisbon, Cartographer in Japan 1590-1592'. Imago Mvndi XVI. 1962. 117~118頁。
- 27) シュütte前掲27) 118頁。
- 28) シュütte前掲27) 118頁。
- 29) シュütte前掲27) 118頁。
- 30) 前掲19) 161頁。
- 31) ローマのイエズス会文書館に保存されている <Iap, Sin. 22, f, 300r-300v>の文書である。シュütte前掲27) 116頁, 注(8)。122頁, 注(67)。
- 32) シュütte前掲27) 122頁。
- 33) 前掲19) 162頁。
- 34) シュütte前掲27) 122~123頁。
- 35) シュütte前掲27) 125頁。
- 36) 前掲23) 76頁。
- 37) 前掲19) 160頁。
- 38) シュütte前掲27) 123頁。
- 39) 前掲23) 150頁。
- 40) 前掲8) 23頁。